

# 令和３年度「高等学校段階の病気療養中等の生徒に対する ICT を活用した 遠隔教育の調査研究事業」成果報告書

実施機関名 宮城県教育委員会

## 1 事業実施前の状況及び課題

本県における、病気療養等のため相当の期間入院又は自宅療養をしている高校生については、令和３年４月に実施した県立高等学校を対象とした「病気療養中等の生徒に対する教育支援に関する実態調査」の結果から、病気やけがのため、令和２年度に年間３０日以上欠席した生徒は４０人おり、そのうち２８名の生徒に対して何らかの形で学習支援が行われたことが分かった。

その一方で、病気療養中による長期欠席を理由に、転学や休学等といった進路変更をした生徒が、転学が３人、休学が３人と依然として存在することも分かり、各高等学校が病気療養中等の高校生に対して在籍校への復学に向けた学習支援や教育機会の継続的な保障について取り組むことができるようにすることが必要であることも分かった。

入院中の高校生に対する学習支援としては、担任が病室を訪問しての個別指導、プリント課題への取組と添削での実施が多かった。しかし、入院生徒の在籍校の教員が、通常業務に加えて、定期的に病院を訪問して学習支援を実施することは難しく、特定の教員（担任等）に負担がかかっている状況が見られた上、プリント課題については、生徒が分からない部分の指導・フォローが難しいといったことが課題として挙げられていた。病院によっては、学生による学習指導ボランティアもあるが、授業時間と認定することができず、履修（欠課時数）問題の解消にはなっていなかった。

本県では、令和元年度と令和２年度に「高等学校段階における入院生徒に対する教育保障体制整備事業」に取り組んでおり、ICTを活用した遠隔授業による学習支援も行われるようになったが、学習支援を実施するにあたり、各高等学校は病院との連絡や支援連携体制の構築をどのように進めていけばよいのか、学校側は難しさを感じていた。その課題に対応するため、医療機関と教育機関をつなぎ、連携をコーディネートする「医教連携コーディネーター」を宮城県立こども病院に隣接する県立高等学校に令和２年度から１名配置し、入院生徒に対する様々な課題に対応しながら、学習支援の取組を推進してきた。

令和３年度の本事業では、医教連携コーディネーターを活用した病院と学校の連携の在り方について調査研究に取り組むとともに、各高等学校が病気療養中等の生徒に対する学習支援の必要性を認識し、ICTを活用した学習支援を迅速に実施可能とする体制整備が課題であると捉え、調査研究を進めることにした。

## 2 事業の目的

がん等の疾病や怪我などで長期の療養を要する生徒（以下「病気療養中等の生徒」という。）が治療を受けながら学業を継続できるよう、入院中や退院後の自宅療養中等における教育支援の環境の整備に向け、学校、医療機関及び教育委員会等の関係機関が連携して、ICTを活用した効果的な遠隔教育の活用方法等を始め、教育の保障の在り方についての調査研究を行う。

本事業における主な調査研究の項目は、以下のとおりである。

ア 医教連携コーディネーターを活用した病院と学校の連携

医教連携コーディネーターを活用した学習支援の実践を通して、医療機関と教育機関との連携体制構築の進め方、コーディネーターの役割及びその必要性について検証する。

イ 同時双方向型遠隔授業に関する環境整備

病気療養中等の生徒に対する学習支援として、同時双方向型遠隔授業を中心として進める。同時双方向型遠隔授業を実施する際の通信環境等について検証する。

ウ 同時双方向型遠隔授業に関するデバイスの整備と活用

同時双方向型遠隔授業を実施するにあたり、迅速に支援を開始するための準備や端末等の機器整備について検証する。

エ 実態調査及び事業の周知

県立高等学校を対象に、入院生徒の数や病気の種類、入院先医療機関及び入院期間、教育支援の方法等について調査し、病気療養中等の生徒に対する学習支援の状況を把握する。また、学習支援に関するリーフレット等を配布し、本事業について周知する。

オ 学校等への理解啓発

教育機関や医療機関等に対して、病気療養中等の生徒への学習機支援の意義及びその必要性について、有識者等の協力を得ながら理解啓発を図る。

### 3 事業の内容及び成果

#### (1) 実施体制

- 令和2年度から、宮城県立こども病院に隣接する宮城県立高等学校に「医教連携コーディネーター」を1名配置し、入院生徒に対する学習支援を推進してきた。医教連携コーディネーターは、学校が主体となって実施する入院生徒に対する学習支援について、要望に応じて学校や病院に向き、入院生徒の状況や取組を開始するまでの流れ、必要事項を共有しながら連絡・調整を行い、学校の支援体制づくりなどのサポート等を行った。
- 事務局は高校教育課教育指導班の事業担当者が担い、医教連携コーディネーターと共に、学校への説明を行うとともに同時双方向型遠隔授業に関するデバイスの整備等を行った。事務局では、学校において病気療養中等の生徒に対する学習支援が必要となった際に、速やかに同時双方向型遠隔授業を実施することができるよう、病室で使用できる端末（Chromebook）やテレプレゼンスロボット等の機器を準備し、学校に貸出等の対応を行った。
- 入院先病院でのICTを活用した学習支援については、連携体制の整備が進んだ小児がん拠点病院である東北大学病院や小児がん連携病院である宮城県立こども病院を中心に進めているが、高校生が入院する病院は他にもあり、協力可能な病院を増やし、連携体制の構築を進めた。
- 東北大学病院では、主に小児科（医師及び看護師長）、医療ソーシャルワーカー（以下、「SW」という）、医事課、地域医療連携課等と連携について確認するとともに、連絡体制を構築した。また、宮城県立こども病院では、主に血液腫瘍科科長、看護師長、隣接する特別支援学校の特別支援教育コーディネーターとの連絡体制を構築し、学習支援の取組を進めた。
- 2つの病院との連携・連絡体制の構築により、入院生徒に関して情報の把握と共有ができるとともに、医療スタッフによる専門的な見地からの助言を基に、医教連携コーディネーターの役割、効果的で持続可能な支援の在り方及び進め方について、実践をと通して検証した。
- 入院生徒の在籍校の体制については、校長のリーダーシップの下、主に教頭や学年主任が窓口となり、担任、特別支援教育コーディネーターや養護教諭等がチームを組み、医教連携コーディネ

ネーターのサポートを受けながら、学習計画等を作成し、支援に取り組んだ。

図 医教連携コーディネーターを中心とした病院と学校との連携イメージ



## (2) 取組及び成果

### ア 医教連携コーディネーターを活用した病院と学校の連携

#### ①「医教連携コーディネーター」の活用実績と成果

医教連携コーディネーターの活用実績と成果は次のとおりである。

| 主な経歴・資格                                  | 活動内容実績活動形態（回数）                                                                                                                                                                                                                                                               |
|------------------------------------------|------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| 医教連携コーディネーター（前任校の特別支援学校では特別支援教育コーディネーター） | <p>宮城県立高校（宮城広瀬高校）に在籍・在駐し、県立高校からの相談及び要請に応じて学校と病院をつなぐことでオンライン授業等の学習支援をコーディネートした。</p> <p>対象生徒の在籍校を訪問して諸確認や支援の準備（17回）<br/>           病院のカンファレンスへの参加や支援の準備等（28回）<br/>           校内研修及び管理職研修会にて講演（3回）<br/>           地域の支援学校および同 CN との情報交換（2回）<br/>           電話・メール等による相談（2回）</p> |
| 具体的な活動内容と役割                              | 活動の成果                                                                                                                                                                                                                                                                        |
| ①対象生徒の在籍校を訪問し、諸確認や支援の準備等                 | ① 同時双方向型遠隔授業による支援を実施するにあたり、医教連携コーディネーターが学校を訪問し、学習支援の進め方、開始までの流れ等を説明した。学校の事情を伺い、入院生徒の状態や院内の状況を勘案して支援内容を提案した。また、同時双方向型遠隔授業で使用する機材設定に伴い、学校側の負担軽減に資するように準備を手伝うことができた。                                                                                                            |

|                                         |                                                                                                                                                                                                                                                                                                       |
|-----------------------------------------|-------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| <p>②病院のカンファレンスへの参加や支援の準備等</p>           | <p>② 新型コロナウイルス感染症の影響により、カンファレンスへの参加はオンラインが中心であった。学習支援や復学に伴う課題を整理した。遠隔授業の端末設定等では、生徒自身がオンライン授業にアクセスできるようになるまで支援した。また、デバイスや Web 会議システムのアプリについては、どの生徒も同じものを使用することで医療スタッフも支援機材等に慣れ、医教連携コーディネーターが不在の時でも対応が可能となった。</p> <p>東北大学病院においては、医療ソーシャルワーカーとの連絡体制が構築でき、小児科以外に入院した高校生の情報も得ることができるようになり、早期対応の一助となった。</p> |
| <p>③校内研修及び管理職研修会にて講演</p>                | <p>③ 入院生徒の在籍校における教職員向けの校内研修や、高等学校長会や教頭会の研修会において、県内で実施している入院中の高校生への学習支援や遠隔授業の取組を紹介し、理解啓発を図った。学校側が抱いていた、遠隔授業の実施や教職員の負担、病院との連絡体制構築などの不安を解消することができた。</p>                                                                                                                                                  |
| <p>④地域の特別支援学校及び特別支援教育コーディネーターとの情報交換</p> | <p>④ 県立こども病院に隣接する特別支援学校と情報交換を行った。病弱教育の研修会の案内を受けたり、高校生支援のパンフレット作成等に協力したりした。</p>                                                                                                                                                                                                                        |
| <p>⑤電話・メール等による相談</p>                    | <p>⑤ 過去に支援した学校の関係者による新規相談や、病院関係者から県立学校以外についての相談も寄せられており、医教連携コーディネーターの存在が少しずつ認知されている。</p>                                                                                                                                                                                                              |

## ②令和 3 年度の支援事例

令和 3 年度は、東北大学病院が 4 件、県立こども病院が 1 件、両院以外での支援が 2 件であった（下記の表を参照）。事業の周知を行ってきた成果もあり、この他にも学校からの問い合わせが増加している。

令和 3 年度は、病院の理解と協力により、入院中の定期考査の病院受験や大学推薦入試の病院受験といった新たな支援の試みも実施することができた。

表 令和3年度の支援事例

| 学校<br>(学年)    | 病院 (入院科)              | 入院期間等            | 主な支援内容                                          | 通信環境<br>使用機器                   |
|---------------|-----------------------|------------------|-------------------------------------------------|--------------------------------|
| ①県立高校<br>(1年) | 東北大学病院<br>(小児科)       | 7か月              | 同時双方向型遠隔授業 (病室)<br>出席認定、退院後に復学                  | 病院 Wi-Fi<br>iPad、Kubi          |
| ②県立高校<br>(2年) | 東北大学病院<br>(リウマチ膠原病内科) | 2か月入院<br>その後自宅療養 | 同時双方向型遠隔授業 (病室、<br>自宅) 出席認定<br>退院後、自宅療養中の学習支援   | 病院及び自宅<br>の Wi-Fi<br>iPad、Kubi |
| ③県立高校<br>(3年) | 東北大学病院<br>(脳外科)       | 10か月             | 同時双方向型遠隔授業 (病室)<br>出席認定、定期考査病院受験<br>退院後に復学、卒業認定 | 病院 Wi-Fi<br>Chromebook         |
| ④県立高校<br>(2年) | 仙台市内病院<br>(整形外科)      | 3週間              | 同時双方向型遠隔授業 (病室)<br>出席認定、退院後に復学                  | Wi-Fi ルーター<br>貸出               |
| ⑤県立高校<br>(3年) | 栗原市内病院<br>(整形外科)      | 2か月              | 同時双方向型遠隔授業 (病室)<br>出席認定、退院後に復学                  | Wi-Fi ルーター<br>貸出               |
| ⑥県立高校<br>(1年) | 県立こども病院<br>(血液腫瘍科)    | R3.9～ 入院中        | 同時双方向型遠隔授業 (病室)<br>出席認定、定期考査病院受験                | 病院 Wi-Fi<br>Kubi<br>Chromebook |
| ⑦県立高校<br>(3年) | 東北大学病院<br>(小児科)       | 3か月              | 同時双方向型遠隔授業 (病室)<br>出席認定、大学推薦入試病院受験<br>卒業認定      | 病院 Wi-Fi<br>Kubi<br>Chromebook |

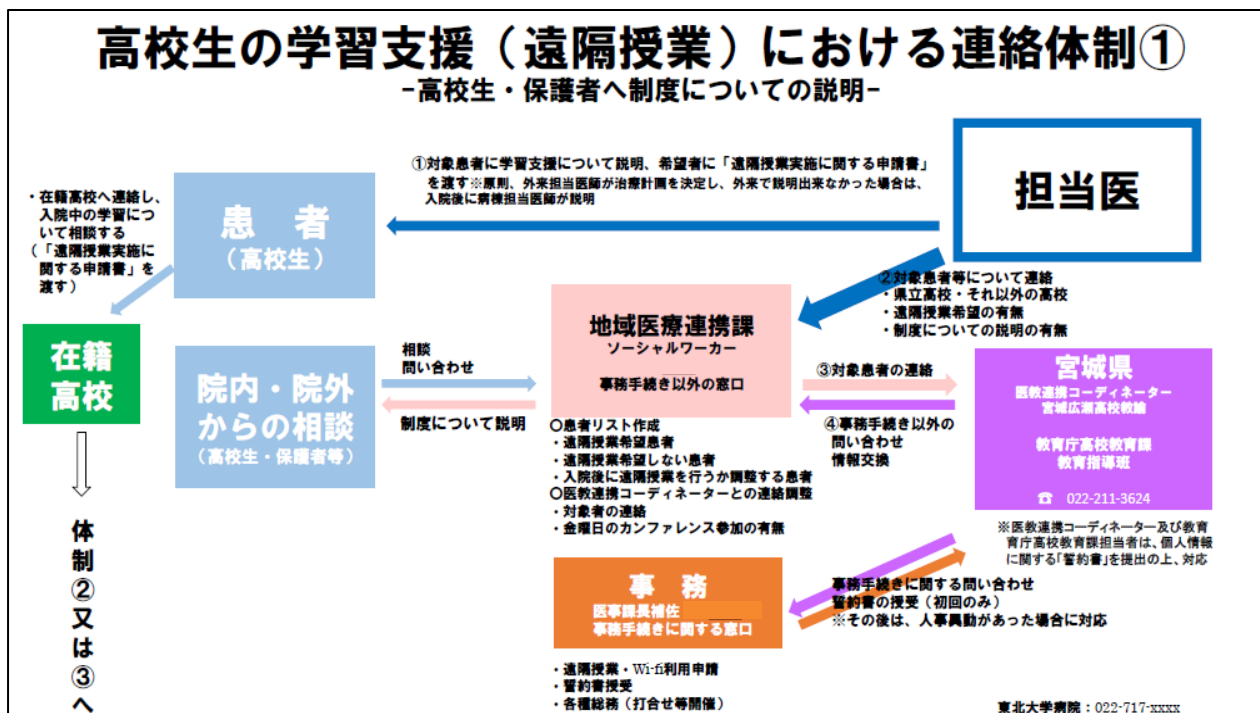
### ③病院との学習支援に係る連絡体制

#### ○高校生の学習支援（遠隔授業）における連絡体制について

高校生が多く入院する東北大学病院や宮城県立こども病院では、令和元年度、令和2年度の事業において連携体制を築き、遠隔授業による学習支援の実施のため、病院内の Wi-Fi ネットワーク環境等の使用が認められている。2つの病院とは、連絡会議を開き、高校生の入院から学習支援の開始までの流れ、学習支援の実施状況等について情報共有し、連携体制・学習支援の在り方について確認を行っている。

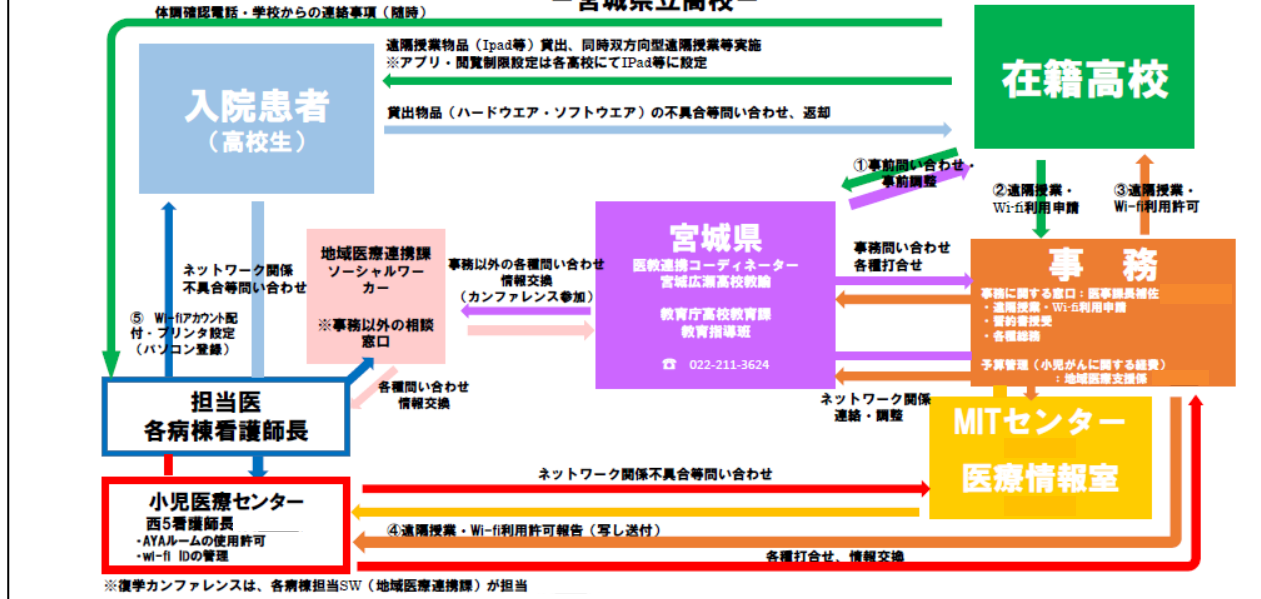
東北大学病院と確認した連絡体制は、次の図のとおりである。

図 東北大学病院における「高校生の学習支援（遠隔授業）における連絡体制」



## 高校生の学習支援（遠隔授業）における連絡体制②

－宮城県立高校－



## 高校生の学習支援（遠隔授業）における連絡体制③

－市立・私立高校（宮城県立以外）－



学習支援を実施するに当たり、学校と病院が連絡・調整を図る医教連携コーディネーターの存在が有効である。医教連携コーディネーターが必要に応じてカンファレンスに参加して、入院生徒の状況を把握するとともに、主治医や看護師、医療ソーシャルワーカー等と支援の方向性を確認・調整し、入院生徒の在籍校と情報共有することが、スムーズな学習支援の実施につながっている。

また、新型コロナウイルス感染症感染拡大の影響により、入院生徒在籍校の教員であっても、面会ができず、課題の受け渡しや遠隔授業の実施に向けた機材のセッティングなどできない状況もあった。そのような状況において、医教連携コーディネーターが病院から許可を得て、在籍校の教員に代わり病室等を訪問し、入院生徒に対するフォローを行う場面もあった。新たな試みであった

定期考査の病院受験においても、医教連携コーディネーターが病室に入り、試験監督を行い、答案を学校に届ける形を取り、実施することができた。病院からは、医療スタッフが試験監督をする等の協力が可能であるとの提案もあった。

#### ○東北大学病院・宮城県立こども病院との連絡会議について

東北大学病院と宮城県立こども病院の2つの病院においては、入院中の高校生への学習支援に関する連絡会議の実施をお願いし、学習支援の実施状況と課題を確認し、今後の方向性について教示を受けた。

（東北大学病院との連絡会議）

- ・日 時 令和4年1月25日（火）9：30～10：45
- ・場 所 東北大学病院 キャンサーボード室
- ・出席者 東北大学病院 小児科 科長、看護部 看護師長、小児科 臨床心理士  
地域医療連携課地域医療連携係 SW（ソーシャルワーカー）、医事課  
課長補佐 地域医療連携課 課長補佐  
地域医療連携課地域医療支援係長  
仙台市教育委員会学校教育部特別支援教育課 指導主事  
高校教育課 指導主事  
宮城県教育庁高校教育課 指導主事、医教連携コーディネーター

- ・内 容 ○東北大学病院での実施状況  
入院生徒への学習支援の窓口となっているSWから、実施事例の報告
- 実施状況から見えてきた課題  
入院してから支援開始までにかかる時間  
入院中に遠隔授業を受けても、退院後に学校の授業についていけないケース  
長期入院だけでなく、短期入院でも遠隔授業を受けられるようにしたい
- 課題の解決方法等についての意見交換  
遠隔授業に対する学校間の意識の差について  
大学院生による学習ボランティアの活用について  
私立高校の学習支援が進まない状況について
- 次回の連絡会議について

（宮城県立こども病院との連絡会議）

- ・日 時 令和4年2月10日（木）16：00～16：40
- ・場 所 宮城県立こども病院 拓桃館会議室
- ・出席者 こども病院 血液腫瘍科 科長、血液腫瘍科 部長、病棟師長、  
血液腫瘍科 医師、拓桃支援学校特別支援教育コーディネーター  
宮城県教育庁高校教育課 指導主事、医教連携コーディネーター
- ・内 容 ○こども病院での取組状況  
入院中の高校1年生の授業支援（学校からの課題の受信と配布等）  
学習ボランティアによる支援  
感染対策における学習支援
- 学習支援における課題  
学習支援の環境整備  
患者本人の学習意欲、要望

2つの病院との連絡会議については、別々に開催したが、令和4年度からは、東北大学病院と宮

城県立こども病院、宮城県教育委員会の担当者、そして仙台市立高校を所管する仙台市教育委員会の担当者を構成員とし、一堂に会しての連絡会議の形で開催してはどうかとの意見が出され、2つの病院との協議の結果、その形で開催することが了承された。今後も病気療養中等の生徒に対する学習支援体制を更に発展・拡大させていきたいと考えている。

## イ 同時双方向型遠隔授業に関する環境整備

東北大学病院と宮城県立こども病院では、入院している高校生が学校からの遠隔授業を受けるために病院内のネットワーク（Wi-Fi）の使用が認められているほか、東北大学病院では高校生等の学習室として「AYAルーム」が整備され、学校から配信された課題を設置されているプリンターで印刷することもできるなど、学習する環境が整えられている。

病院内のネットワークの利用が不可能な病院については、学校及び入院生徒の希望に応じて、遠隔授業が実施できるよう県教育委員会からモバイル Wi-Fi ルーターを貸し出して対応している。

また、県教育委員会が全ての県立学校に「Google Workspace for Education」を導入し、全ての生徒に対してアカウントを発行し配付していることから、各学校では遠隔授業の実施やオンラインでの課題等の配布についてスムーズに対応することが可能となっている。入院生徒の在籍校は、「Google Workspace for Education」について、授業の配信はもちろんのこと、入院生徒と他の生徒との交流等にも効果的に活用している。

本事業での遠隔授業を中心とした学習支援に取り組み、その成果として、校内のオンライン授業が推進したという学校からの報告もあった。

## ウ 同時双方向型遠隔授業に関するデバイス等の整備と活用

### ①デバイス等の整備及び活用について

遠隔授業で使用する機材として、県教育委員会ではタブレット端末（Chromebook）やテレプレゼンスロボット（Kubi）、ヘッドセット、タブレットスタンド等を整備し、貸し出している。

Kubi の活用は、入院している生徒の存在を、教室にいる他の生徒に感じさせるのに有効であることが分かった。Kubi を授業内のペアワークやグループワークで活用した学校では、病室の生徒が協働作業などに参加しながら活動させることができた。ロボットの操作を通じて自分の意思表示を行うことができる、Kubi 等のテレプレゼンスロボットの活用については、ICTの活用を含め、新たな形での教育活動の可能性についての研究につながった。

また、同時双方向型遠隔授業の実施は、病気療養中の生徒に対して教育機会の保障のみならず、「治療への意欲向上」「退院後のスムーズな学校復帰」に大きく寄与していることも分かった。

このことについては、令和3年度に実施した学習支援の事例のうち一人の生徒について、医療ソーシャルワーカーから下記のような報告がなされている。

「やっと（自分の居場所に）戻ることができます。」Aさんは、高校入学と同時に入院したため、校舎に入ることもできず、入学式や最初のHRにも参加できませんでした。同じようなこれまでのケースでは、「学校に行くのが不安だ」という生徒がほとんどでした。

学習支援というと「勉強」にフォーカスされがちですが、この事例は「安心して学校に戻る・通うことができる」ためには、オンラインによる友達とのふれ合いや何気ない会話などが非常に重要であることを物語っています。学級担任の先生をはじめ、友達の温かな言葉がけや気遣いが、Aさんのつらい治療や孤独な学習のモチベーションになっていました。

## ②Google Workspace for Education の活用について

本県教育委員会では、全ての県立学校に「Google Workspace for Education」を導入し、全ての生徒に対してアカウントを発行し配付していることから、「Google Workspace for Education」を活用して、遠隔授業による学習支援を推進している。

### ○Google Classroom の活用

- ・入院生徒専用のクラスを作成し、授業担当者と生徒を登録。
- ・授業プリント、小テストなどを Classroom で配信および回収。  
例）事前に小テストを配信し、生徒が解答。その後、解答したテストを写真で撮影し、データで送り返してもらう。採点・添削をして返信。  
Google form で小テストを作成し、配信。生徒が解答すると自動採点され、生徒へフィードバックすることができる。
- ・教員が作成した課題等も、作成→送信→解答→返信→確認の手順を踏めば、他の生徒と同じような対応が可能。
- ・課題の配信だけでなく、Classroom のストリーム（掲示板のような機能）に連絡事項を投稿し、その日の連絡事項を入院生徒に伝えることも可能。
- ・入院生徒は、教室にいる生徒が朝のショートホームルームで学級担任から伝えられる連絡事項と同じ情報を Classroom のストリームから確認する。入院生徒は、教室の生徒と同じ情報を得ることで、学校の様子を知ることができる。
- ・また、入院生徒からストリームを通して、学校に直接その日の体調等を伝えることができ、学校側は、病院（看護師等）と確認連絡をせずに、遠隔授業の実施の可否を確認することもできる。

### ○Google Meet の活用

- ・同時双方向型遠隔授業を実施するための Web 会議システムとして「Google Meet」を利用している。
- ・Google Meet は Google Classroom と連携しており、生徒は Classroom のクラスからオンラインでの授業に容易に参加することができるのが利点である。
- ・どの生徒も同じアプリ（システム）を利用することにより、医療スタッフも支援機材等に慣れ、医教連携コーディネーターが不在の時でもトラブル等への対応が可能となっている。

## ③テレプレゼンスロボット「Kubi」の活用

- ・教室側において Google Meet でオンライン接続した iPad を Kubi にセットし、病室側から端末（Chromebook 等）で専用のアプリ「Kubi Connect」を使用して遠隔操作させた。
- ・Kubi にセットした iPad は、基本的にディスプレイを黒板側に向け、授業実施者は入院生徒の様子、表情等を確認しながら授業を進めた。入院生徒が顔を見せたくないなどの希望があれば、カメラはオフにし、音声のみのやりとりとしている。
- ・「見えにくい」、「声が聞こえにくい」等の不具合がある場合でも、本人が画面に映ることが可能であれば挙手して知らせるほか、遠隔操作で Kubi を動かすことにより意思表示して知らせることもできる。
- ・双方向でのやりとり、意思表示、自分が向きたい方向を向くことなどが可能なので、授業中のペアワーク・グループワークでも活用し、参加することができた。

- ・実技教科では、通常の授業見学と変わらない状況で、画面を通して出席を確認したり、その授業での指示等を伝えたりすることもできた。（今回実施できたのは、体育のみ）
- ・担任だけでなく、授業に関わる教員側の理解と協力が必要となる。事前に機器の操作方法を提示し、不具合があった場合に対応する教員を想定した学校もあった。
- ・「一番助けられたのは、クラスの生徒の協力であった。教室を移動する場合は Kubi を運んでもらい、簡単なセッティングも行ってもらった。」という学習支援を実施した学校からの報告もあり、クラスでは様々な配慮ができる生徒が育っている。

## エ 実態調査及び事業の周知

### ①実態調査について

令和3年4月に県立高等学校に対して「病気療養中等の生徒に関する実態調査」を実施した。調査の結果、令和2年度に疾病や怪我等による入院または自宅療養のため年間延べ30日以上欠席した生徒が40名いることが分かり、何らかの形で学習支援が行われた生徒が28人、支援が行われなかった生徒が12人であった。平成30年度、令和元年度に比べると、支援が行われた割合が若干ではあるが増加しており、進路変更等については、転学や休学をした生徒が依然としているものの、退学者は0人であった。ICTを活用した遠隔授業による学習支援について認知が進み、実施件数が増加していることも分かった。

その一方で、「治療を優先するため」「本人の病状の回復を優先したため」等の理由から入院中の学習支援が行われなかったケースもあり、依然として、在籍している高校から十分に学習支援を受けることができていない実態があることについても再認識する結果となった。

#### ○長期療養により30日以上欠席した生徒数 (人)

| 年度/内訳 |  | 病気 | 怪我 | 計  |
|-------|--|----|----|----|
| H30年度 |  | 41 | 8  | 49 |
| R1年度  |  | 18 | 7  | 25 |
| R2年度  |  | 25 | 15 | 40 |

#### ○支援件数、進路変更等について (人)

| 年度/内訳 | 支援あり | 支援なし | 転学/休学/退学  |
|-------|------|------|-----------|
| H30年度 | 33   | 16   | 3 / 4 / 5 |
| R1年度  | 17   | 8    | 1 / 2 / 4 |
| R2年度  | 28   | 12   | 3 / 3 / 0 |

### ②事業の周知について

「入院している高校生に対する学習支援」についてのリーフレットを病院や県内の高等学校、特別支援学校等に配布して周知した。また、公立学校長会議や高等学校教頭・副校長会議においても事業の概要を説明するとともに、資料としてリーフレットを配布した。入院生徒への支援について、認知度も上がり、各高等学校からの問合せも増加した。

## オ 学校等への理解啓発

### ①医教連携コーディネーターによる講演、事例紹介

医教連携コーディネーターが要請を受けて、高等学校の校内研修や高等学校長協会及び教頭研修

会において講演し、実践事例を紹介することで、入院生徒に対する学習支援について、学校現場への理解・啓発を図った。

医教連携コーディネーターの講演内容の概要は、下記のとおりである。

○（石巻地区）高等学校 特別支援教育校内研修会（令和3年6月17日）

「宮城県における高等学校段階の入院生徒に対する学習支援について」

（内容）・小児がん、AYA世代について

- ・長期入院に対する教師のマインドや学校の対応
- ・長期入院生徒に対する支援等の実際の取組から
- ・長期入院に対する病院側のマインド
- ・令和2年度 宮城県立高校の取組
- ・テレプレゼンスロボット「Kubi」について
- ・東北大学病院AYAルーム（学習支援室）について
- ・教育的ニーズについて
- ・マイノリティだけでなくマジョリティにも必要な「モデリング」としての支援

○石巻地区高校副校長・教頭会研修会（令和3年11月15日）

「長期入院をしている高校生の学習支援について～医教連携コーディネーターの立場から～」

（内容）・教育保障体制整備事業の背景

- ・「入院します」と連絡が入ったら（学習支援開始までの流れ）
- ・支援の事例 ～成果と課題～

○宮城県高等学校長協会 教育課程研究委員会講演会（令和3年12月7日）

「遠隔教育システムの活用と医教連携」

（内容）・宮城県立高校における「長期入院生徒に対する支援等」

- ・これまでの事例から（医教連携コーディネーターの役割）
- ・遠隔授業で使用する機器について
- ・テレプレゼンスロボット「Kubi」について
- ・遠隔教育に関する近年の大きな変化（コロナ禍での学習、GIGAスクール構想）
- ・医療に関する近年の大きな変化（小児がんサバイバーの割合、高校生の学習支援）
- ・教育に関する近年の大きな変化（遠隔授業の正規化、要件緩和等）
- ・東北大学病院AYAルームについて
- ・支援及び相談件数について
- ・長期入院から復帰した生徒の声

## ②教員向け研修会について

病気療養中等の高校生に対する学習支援について、更に充実させていくためにはどのような取組が必要か考え、学校関係者や医療関係者等と共有することを目的に、「病気療養中の高校生への学習支援の必要性和意義」をテーマとして、「入院している高校生への学習支援に関するセミナー」を計画した。

セミナーの案内については、高等学校の他に東北大学病院や宮城県立こども病院、県内各地の総合病院に送付した。参加希望については、県立高等学校の教員だけでなく、私立高等学校の教員、医療関係者からも多くの申込みがあり、入院中の高校生への学習支援に対して、関心が高いことが分かった。令和4年3月16日に発生した福島県沖を震源とする地震の影響により、実施を見送

ることとなったが、高等学校に対して、引き続き、学習支援に関する理解・啓発を図る取組を継続して行っていきたい。

予定していたセミナーの概要等は、次のとおりである。

#### (ア) セミナーの概要

##### 1 趣 旨

がん等の疾病や怪我などで長期の療養を要する生徒が治療を受けながら学業を継続できるよう、入院中や退院後の自宅療養中等における教育支援の環境を整備し、学習機会を確保することが求められている。本県では、学校、医療機関及び教育委員会等の関係機関が連携して、ICTを活用した効果的な遠隔教育を始め、教育の保障の在り方についての調査研究を行っている。

病気療養中の高校生に対する学習支援について、さらに充実させていくためにどのような取組が必要かなど、本セミナーにおいて学校関係者、医療関係者をはじめ多くの方々と共有する。

##### 2 テーマ 『病気療養中の高校生への学習支援の必要性と意義』

##### 3 日 時 令和4年3月17日（木） 午後2時30分から午後4時30分まで

##### 4 開催方法 オンライン開催

Web会議システム（Webex）によるリアルタイムでのオンライン配信

※新型コロナウイルス感染症感染状況を考慮し、オンライン開催とする。

##### 5 日 程（予定）

14：30～ 開会行事

14：35～ 講演Ⅰ

演題「入院生徒への学習支援の必要性とその意義について」

講師 宮城県立こども病院

血液腫瘍科 科長 佐藤 篤 氏

15：20～ 講演Ⅱ

演題「宮城県における医教連携と遠隔教育の取組について」

講師 医教連携コーディネーター

宮城県宮城広瀬高等学校 教諭 加茂 純 氏

16：00～ 質疑・意見交換、閉会

##### 6 対象者

(1) 教育関係者 県立高等学校・特別支援学校 特別支援教育コーディネーター等  
市立高等学校及び私立高等学校希望教員

(2) 医療関係者 県内病院の医師、看護師、医療ソーシャルワーカー等

#### (イ) 講演の内容（予定していたもの）

講演Ⅰ 「入院生徒への学習支援の必要性とその意義について」

宮城県立こども病院 血液腫瘍科 科長 佐藤 篤 氏

(内容)・小児急性白血病の治療の進歩～AYA世代も含めて～

・小児がんのトータルケアと学校の重要性

・AYA世代がん患者さんの悩みと学習支援の現状について

・当院（宮城県立こども病院）の取組

講演Ⅱ 「宮城県における医教連携と遠隔教育の取組について」

医教連携コーディネーター

宮城県宮城広瀬高等学校 教諭 加茂 純 氏

(内容)・長期療養中の生徒への学習支援の必要性

- ・オンライン授業による学習支援が求められる理由
- ・医教連携コーディネーターが配置された理由
- ・支援を開始するための手続きについて
- ・機材の準備について
- ・オンライン授業の実際
- ・支援の事例、長期入院から復帰した生徒の声

## 4 今後の課題と対応

### ア コロナ禍における学習支援体制の在り方

入院生徒への面会に制限がかかり、学校の教員が訪問して指導することが難しい状況となることがある。状況によっては、コーディネーターの面会にも制限が及ぶ場合があり、病院関係者の協力を得て学習環境を整えるなどの対応が必要となることが考えられる。学習支援開始までの一連の流れを共有するなど、病院との連携を深める必要がある。

### イ 通信環境と機器整備について

通信環境と遠隔授業での学習支援で使用するタブレット端末等の整備については、継続的な課題であると考えている。院内のWi-Fiを使用できない病院では、モバイルWi-Fiルーターを借りる必要がある。授業の配信・受信について、より良い環境、機材は何か、現状を分析して効果や有効性について検証を重ねていくことが必要である。

### ウ 学習支援（遠隔授業）に対する理解

事業について理解が進んできているが、依然として遠隔授業等の実施をためらう学校があり、学校間で意識の差がある。どの高校であっても学習支援が実施されるよう、学習支援の有効性、必要性について理解・啓発を行っていく必要がある。

これまでの実践例を基に、機器操作に関してマニュアル作り等も進めている。学習支援の進め方について資料を整理して各学校に周知するとともに、研修会やセミナーの実施など、工夫して理解・啓発を図っていきたい。

### エ 広域的な教育支援連携体制の構築

現在は、連携体制が整った東北大学病院及び宮城県立こども病院を中心に遠隔教育等による教育支援を実施しているが、県内のほかの病院にも長期療養を要する生徒が入院している。居住地域や学校の所在地域による格差を生じさせることなく教育支援を推進することが必要である。

県内の各地域の医療機関で教育支援が実施できるよう、東北大学病院や県立こども病院での実践事例を参考に、入院中の高校生への学習支援について理解・啓発を図る必要がある。

また、東北大学病院や県立こども病院には、本県以外の高等学校に在籍する生徒も入院している。他県の高等学校に在籍する入院生徒への支援については、それぞれの自治体の判断となるが、教育支援の在り方に格差が生じないよう自治体間の協力体制を整える必要もある。

## 5 問い合わせ先

担当部署：宮城県教育庁高校教育課教育指導第一班  
所 在 地：宮城県仙台市青葉区本町三丁目 8 番 1 号  
電話番号：0 2 2－2 1 1－3 6 2 4  
FAX番号：0 2 2－2 1 1－3 6 9 6  
e-mail：[ko-kyou@pref.miyagi.lg.jp](mailto:ko-kyou@pref.miyagi.lg.jp)